



独立行政法人

大学改革支援・学位授与機構

National Institution for Academic Degrees and Quality Enhancement of Higher Education

機構ニュース

Vol.229 2022 July

今月の記事

Top News

- 「大学改革支援・学位授与機構で学士の学位取得をめざす方へのオンライン説明会」を開催
.....1

質保証連携

- 令和4年度大学質保証フォーラムをオンライン開催
.....2

調査研究

- 橋爪宏達特任教授の論文が先月に引き続き情報処理学会特選論文に選ばれる3
- 研究開発部教員紹介4

評価事業

大学機関別認証評価等について

- 大学機関別認証評価 評価担当者に対する研修の実施
.....7

高等専門学校機関別認証評価について

- 高等専門学校機関別認証評価 評価担当者に対する研修の実施
.....7

法科大学院認証評価について

- 法科大学院認証評価 評価担当者に対する研修の実施8
- 「法科大学院認証評価に関する説明会」及び「令和5年度に実施する法科大学院認証評価に関する自己評価担当者等に対する研修会」の開催7

学位授与事業

短期大学・高等専門学校卒業生等を対象とする単位積み上げ型の学位授与関係

- 令和4年度4月期申請に係る学位授与試験を実施9
- 令和4年度10月期申請について9

機構の窓

- 新型コロナウイルス感染症対策について10

主要行事日程

- Schedule（7月～9月）11

TOP NEWS

○ 「大学改革支援・学位授与機構で学士の学位取得をめざす方へのオンライン説明会」を開催



動画コンテンツ「単位積み上げ型の学士の学位授与制度」より

信等に関する技術的なノウハウを活用することにより、放送大学 10 月入学生募集や学位授与申請者への案内として、オンライン（放送大学と当機構を Zoom 接続して YouTube で説明内容を配信）での開催となりました。

6月上旬から両機関のウェブサイト等で募集したところ、全国から 200 名を超える方々の参加申し込みがありました。当日は、参加登録者に YouTube の限定配信接続先の URL を送信してアクセスしてもらい、約 90 分間の視聴件数は平均して 130～150 件を記録しました。

放送大学の司会（MC）によりスムーズに進行したオンライン説明会は、当機構が制作した動画コンテンツ「単位積み上げ型の学士の学位授与制度」を視聴いただいた後、「学位授与申請の手続きについて」と題して、機構の制度による学位取得の流れを「[新しい学士への途](#)」に即して説明しました。その後、「事前質問への回答コーナー」として、事前に多く寄せられた質問と回答を整理して紹介しました。

当機構と放送大学は、コロナ禍においても種々工夫をして、今後も共同で説明会等を企画することを検討しています。

なお、動画コンテンツ「単位積み上げ型の学士の学位授与制度」（約 15 分間）は、[当機構ウェブサイト](#)からアクセス〔YouTube にリンク〕して、いつでも何度でも視聴することができます。

当機構は、令和 4 年 6 月 18 日（土）、「大学改革支援・学位授与機構で学士の学位取得をめざす方へのオンライン説明会」を放送大学と共同で開催しました。

当機構と放送大学は、平成 26 年度に、生涯学習社会における高等教育の推進という共通の目的の下、学位授与事業と大学教育活動で相互に協力していくための協定を締結しており、本説明会もその一環として行われています。

昨年度に引き続き、放送大学のオンライン配

質保証連携

○ 令和4年度大学質保証フォーラムを9月にオンライン開催

当機構では、大学等の質保証に携わる人材の育成を図り、日本の高等教育に質保証文化を定着させることを目的として、毎年「大学質保証フォーラム」を開催しています。今年度は、「大学内外の学びの接続を考える―多様な学習が生きる社会へ―」をテーマに、令和4年9月28日（水）の午後にオンラインで開催します。

高等教育は、修業年限、そしてキャンパスや教室という時空的制約を前提としてその質保証を問題としてきましたが、少子高齢化やポストコロナ・ニューノーマル社会の出現によって、その制約の自明性は失われつつあります。また、日本を含む各国では、すでに生涯学習における高等教育の役割が拡大を始めており、就業経験、入学前学習、細分化された学習履歴（マイクロクレデンシャル）などの大学外での学習経験や、大学内であっても授業以外の様々な活動を認定するための取組が試みられています。これらの取組は、高等教育の社会的意義の再考を促すだけでなく、その質保証に関して新たな視座が求められています。

当日は、国内外の有識者を招き、大学内外における学びの接続と継続のあり方について理解を深め、今後の日本の高等教育とその質保証の姿を議論する機会としたいと考えています。

なお、フォーラムの参加登録については、本年7月下旬頃より当機構ホームページ上で開始予定です。

調査研究

○ 橋爪宏達特任教授の論文が先月に引き続き情報処理学会特選論文に選ばれる

2022年6月公表の情報処理学会論文誌ジャーナル（Vol.63 No.6）に掲載された神鳥勇貴・村上弘晃・須崎 太久弥・中村 将成・渡邊 拓貴・橋爪宏達・杉本 雅則「NLOS環境における音響センシングを用いたスマートフォン間測距手法」^[1]が特選論文として選定されました。

https://www.ipsj.or.jp/award/ssp_award.html（論文本文アクセスは有料です）

テーブルの数メートル以内にいる人にだけ文書ファイルを送りたい、というような位置依存サービス location-based services を実施するため、スマホ同士の距離を計測できると便利です。一方のスマホから音響信号を出し、相手に届くまでの時間を測ることで、それと音速の関係から相互の距離を求める方法は提唱され、使われています。しかし2台のスマホの間に別の人が立っているなど、障害物があると正常に計測できませんでした。

この論文は、NLOS環境、すなわち、障害物があって見通しがきかない (non-line-of-sight) 環境でもスマホ間の距離を測れるように拡張した音響センシング手法を提案しています。障害物があるかどうかを自動的に見分け、それがあると、音を天井で反射させることで障害物を回避します。

直接届く音のほか、天井や壁で反射する音があると、通常は音響センシングの邪魔になるのですが、ここではそれを逆に効果的に使い、音響測距の利用場面を拡大したことが情報処理学会に評価されました。

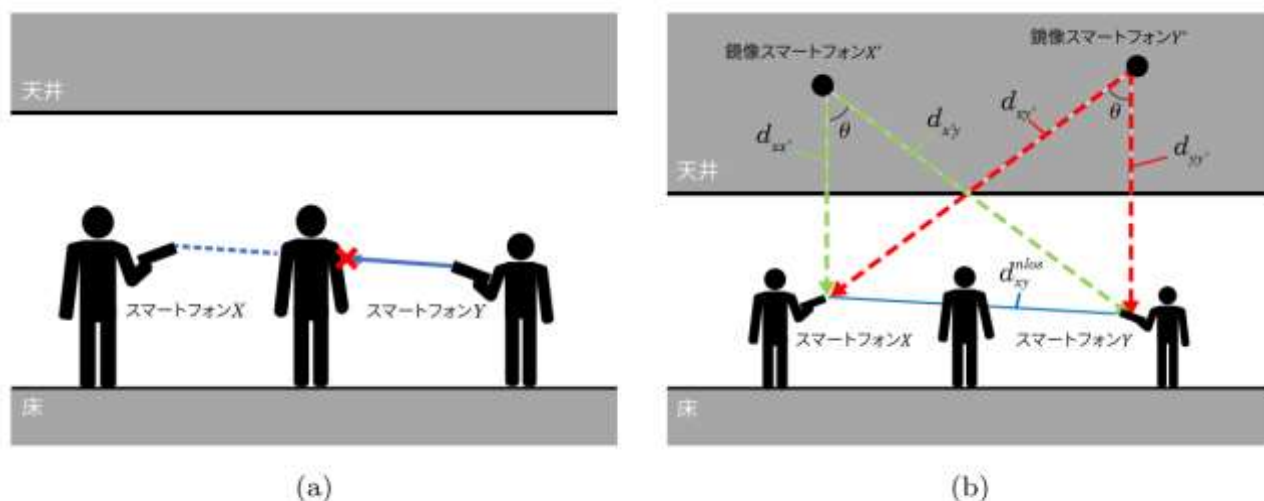


図 3 NLOS 環境下での測距における (a) 従来手法と (b) 提案手法の概要

（[1]より引用）

○ 研究開発部教員紹介

蔵川 圭 研究開発部教授



筆者が2021年（令和3年）4月に大学改革支援・学位授与機構の教員になって以来、東京都小平市にある小平本館という建物に通って1年3ヶ月が過ぎた。ここは一橋大学の小平分校というかつては授業

も行われていた緑豊かな敷地内に位置し、国際学生宿舎も何棟かあって、朝方は国立のキャンパスに出向く留学生と入れ違いにすれ違って行く。居室に入れば広いスペースが確保されていて、晴れた日に窓を開ければ、グラウンドで練習する運動部員の元気な掛け声が聞こえてくる。静かで、ゆったりと、何かを思索するには抜群の良い環境である。

小平本館の建物はガラス張りのどちらかと言えばモダンな作りで、遠方から見れば庇（ひさし）となっているブレードが窓にいくつもついていてアートさを感じさせる。この1階のエントランスホールは私の好きな空間で、壁にはタイル作品と絵画、中庭の前には1つのオブジェが飾ってある。タイル作品は、1951年生まれの米国人芸術家Matt Mullicanによるもので、3つの作品の中でも一際目立つ。32個のピクトグラムによって、我々の存在する世界がどのように生成され、人類がどのようにそれを認識してきたかを物語るストーリーが、ビッグバンから始まり、生命の誕生、道具の発明、技術の進歩、コミュニケーション文化の発展、宇宙カプセルと時系列に表現されている。そして、持続的に変化する世界にとって、人間はもはや無視できない存在であり、人間の主観、その表現手段である言語、言語による世界概念、それによって再構成される世界、繰り返される概念の分裂と統合が、変化のプロセスに重要な役割を演じていると表現されている。機構が一端を担う高等教育はまさにそのことの中心的な現場であろう。

文系や理系といって学問分野を分断することなく、哲

学、人文学、社会学、科学や工学、生物学や薬学、医学、さらにはCGや音楽などの芸術の領域にまで視野を広げ、知性や理性、すぐれた感性を総動員して世界を再構成する人間そのものに興味を持つようになったのは、図らずも1994年から1999年までその修士課程と博士課程の学生として高等教育を受けた東京大学人工物工学研究センター（RACE: Research into Artifacts, Center for Engineering）においてであった。RACEは、当時、東京大学の目黒区に位置する駒場第二キャンパスにあり、工学部のいくつかの学科から、船舶、原子力、機械、精密機械、経済、芸術を専門とする先生たちが集まっていた。学生もそれぞれの学科から先生と共に集まり、私自身は精密機械工学専攻の学生として、学生部屋で出身学科に関係なく、共に議論をし、時には喧嘩をして、時には遊んで、楽しい研究生活を送っていた。目黒区の中でも一際緑が多い敷地で戦前か戦後の古い3階建ての建物を内装だけ綺麗に改修した場所であったが、1階は坂村健先生の使われなくなったTRON研究室があって変わった形のキーボードや計算機の現物を見ることができ、SunのSPARCやSGIのIndyなどのUnix計算機が学生に割り当てられていたし、当時はまだ珍しかったMacや無線LAN付きノートPC、3Dプリンタ（レーザーリソグラフィー）、ドキュメントサーバー、ネットワークケーブル床下フリーアクセス、ATMルーターによる光ファイバー接続、ISDNによる通信、ウェブサーバ、マルチキャスト動画音声通信、六本木の森ビルとの通信を可能とするパラボラアンテナ、Linuxが搭載されたカメラ・センサー付き移動ロボット、プロジェクションマッピング可能な大型プロジェクタなど、先生と学生が計画を立てて購入し、学生が環境構築をしていた。とにかく、情報環境については最先端で使いたい放題であった。先生たちが企画するセミナーには、外部の多様な講師が招待されて、学生もそれに混じって聴講していた。哲学、論理学、倫理学、経済学、数学、芸術、工学など様々な分野の先生との交流を今でも覚えている。

RACEにおける研究テーマは特に何でもよかったが、

そのファウンダーである第 25 代東京大学総長吉川弘之先生の『一般デザイン学』¹（当時は、一般設計学と呼ばれていた）を押さえる必要があった。工学部では、様々な物作りを対象として、対象の科学的性質と設計、設計方法について教えるのが通例であったが、それはセントラルドグマである設計行為そのものに焦点を当て、人間の設計行為はどのようなものであるか、設計者はどのような概念を知識として持ち、どのような過程を経るのかについて一般的抽象的に問う学問であった。また、そのような学問的知識が得られた時、実際のものづくりはどのように実現し、どのような意義を持ち、倫理的にどのようなべきかについて議論してみることも必要とされた。その中で、私が選んだキーワードは「地球環境（保全）」「設計知識共有」「情報環境」であった。地球環境、設計、情報という3つキーワードは、それぞれ、その後の自身の研究や社会的行為の倫理観、問題解決の方策、先進的な技術の有意義な使いこなしへのこだわりにつながっている。

当時必死で考えさせられた学術的概念、キーワードはいくつかあり、それは吉川先生やその本郷キャンパスを拠点とする研究室の学生たち（私にとっては先生）が取り上げていたものだった。設計、概念、機能、実体、知識、論理学、集合論、圏論、帰納推論、演繹推論、アブダクション（仮説形成）、合目的性、総合、倫理、意味とあって、「いぬとりがえる」、「現代の邪悪なるもの」、「おいしい目玉焼きの作り方」などの比喻（そのうち「邪悪」とは聖書に出てくる）、17 世紀ニュートンの『プリンキピア』、パースの『記号論』などの時代を超越した文献だった。精密機械工学は工場などの生産システムを対象とする学問分野であり、そこに所属する学生は機械工学と同様に 4 力（よんりき）と呼ばれる機械力学、材料力学、熱力学、流体力学を学び応用することが一般的である。しかしながら、一般デザイン学では、それとは異なる知識を学ぶこととなった。これは新しい学問か、はたまた学問的宗教か、個人的には長らく謎のまま、学生生活を終え、その後の研究者人生を進めることとなった。

就職後は、奈良先端科学技術大学院大学において、「設計」繋がりでソフトウェア工学やグループウェアに興味を持ち、国立情報学研究所では「情報」繋がりで図書館情報学や学術データベースの研究と事業に取り組んだ。そして、本機構に就職する直前、これまでの研究者人生の中ではごく最近に位置するのであるが、某新聞社の主筆である渡邊恒雄翁が 1989 年から約 30 年間の政治の舞台裏を証言するNHK番組の中で、ボロボロになった岩波文庫のカント著『純粋理性批判』を持ち出して、カントの考えを引用し、それが自身の発想の原点となっていることを力説する姿を見た。それに感化されて、コロナ禍の在宅勤務中に教養と思って読んでみた。原著はドイツ語で 1781 年に出版され、人間理性の抱える諸問題についての古典的名著、ライプニッツなどの存在論的形而上学と、ヒュームの認識論的懐疑論の両方を継承し、かつ批判的に乗り越えた、西洋哲学史上最も重要な書物の一つとされる。人間に本来的に備わっている理性の構造と性質について詳細に論じられて、その応用として、理性は神の存在を証明することは不可能であると結論づけている。今の時代に生きる我々にとって神について議論していることは置いておくとしても、今から 241 年前にここで議論されている純粋理性は、現代の物理学や計算機言語、人工知能における発想の基礎となっていることが理解できる。そしてまた、同時に、『一般デザイン学』は、『純粋理性批判』をお手本としているのではないかとも思えた。議論の着眼点、方法、展開や引用の広さ、用語がとてもよく似ていたからである。その瞬間に、学生の頃より 20 年以上謎のままであった、個人的に学問的宗教として位置付けていたRACEで学んだことを学としての位置付けに収めることができた。何よりも自分は学生時代に工学の哲学をやっていたことに納得した。やっと本来の学位を修めることができたのではないかと実感した瞬間でもあった。

毎朝、機構のエントランスに入るたびに、Matt Mullicanの「Transferring the History of the Subject / Transforming the History of the Subject」と題されたタイル作品を見て、大学院生時代のRACEを思い出す。機構で取り掛かる業務は、大学改革であり、大学評

¹ 吉川弘之、一般デザイン学、岩波書店、2020。

価であり、大学ポートレートを含む情報環境であるものの、これまで高等教育を通して私が学んだことを基礎に、機構の業務を通して、高等教育の世界に恩返しできればと思っている。



Transferring the History of the
Subject/Transforming the History
of the Subject
created by Matt Mullican

くらかわ けい 博士（工学）（東京大学）

令和３年３月まで 国立情報学研究所 学術基盤推進部

学術コンテンツ課 特任准教授

令和３年４月から 本機構研究開発部教授

評価事業

■大学機関別認証評価について

○ 大学機関別認証評価 評価担当者に対する研修の実施

令和4年度に実施する大学機関別認証評価をより実効性の高いものとするため、当機構の評価担当者に対して、評価の目的、内容及び方法等について音声解説付き資料を配付し、研修を行いました。加えて、6月20日（月）から23日（木）にかけて、オンライン形式による質問会や研修会を実施し、研修会においては、土屋研究開発部長による「大学機関別認証評価について」等の説明があり、その後質疑応答が行われました。

■高等専門学校機関別認証評価について

○ 高等専門学校機関別認証評価 評価担当者に対する研修の実施

令和4年度に実施する高等専門学校機関別認証評価をより実効性の高いものとするため、6月8日（水）、16日（木）に、当機構の評価担当者に対し、評価の目的、内容及び方法等についてオンライン形式の研修を行いました。研修においては、飛原研究開発部特任教授による「高等専門学校機関別認証評価について」等の説明があり、その後質疑応答が行われました。

■法科大学院認証評価について

○ 「法科大学院認証評価に関する説明会」及び「令和5年度に実施する法科大学院認証評価に関する自己評価担当者等に対する研修会」の開催

法科大学院を置く大学の自己評価担当教職員等を対象に、機構が実施する法科大学院認証評価の基本的な事柄について、法科大学院の理解を得るため、趣旨等に関する説明を行うこと、また、機構が実施する法科大学院認証評価における法科大学院が行う自己評価の方法等について、法科大学院の自己評価担当者等の評価に対する理解がより深まるよう十分な研修を行うことを目的として、以下（参考）の日程でオンライン形式の説明会及び研修会を行いました。

説明会及び研修会には、国立10大学、公立2大学、私立1大学、その他2機関の合計15機関から合計80人余りの参加がありました。

冒頭の挨拶の後、石井研究開発部教授による「法科大学院評価について」「自己評価書の作成等について」、後藤評価支援課長による「法科大学院認証評価の申請手続き等について」の説明があり、その後、参加者との質疑応答の時間を経て、閉会しました。

(参考)＜法科大学院認証評価に関する説明会及び令和5年度に実施する法科大学院認証評価に関する自己評価担当者等に対する研修会 日程＞

開 催 日	時 間
令和4年6月13日(月)	13:00～16:00



説明会・研修会の様子

※上記の説明会及び研修会の配付資料については、当機構のウェブサイトに掲載しています。

https://www.niad.ac.jp/evaluation/certification_evaluation/graduate_certification/houka_kanren/entry-4721.html

○ 法科大学院認証評価 評価担当者に対する研修の実施

令和4年度に実施する法科大学院認証評価をより実効性の高いものとするため、6月20日(月)から22日(水)にかけて、当機構の評価担当者に対し、評価の目的、内容及び方法等についてオンライン形式の研修を行いました。石井研究開発部教授による「法科大学院認証評価について」等の説明があり、その後質疑応答が行われました。

学位授与事業

短期大学・高等専門学校卒業者等を対象とする単位積み上げ型の学位授与関係

○ 令和4年度4月期申請に係る学位授与試験を実施

「大学改革支援・学位授与機構 令和4年度4月期学位授与試験」として、令和4年6月12（日）に、小論文試験（東京・大阪）と面接試験（東京）を実施しました。
試験の実施状況は次のとおりです。

	（面接試験）	（小論文試験）
（1）受験予定者数	6人	303人
（2）受験者数	6人	300人
（3）欠席者数	0人	3人
（4）受験率	100.0%	99.0%

- ※ 面接試験の受験予定者数及び受験者数には、令和4年7月8日（金）に実施した、追試験受験者1人を含む。
- ※ 小論文試験の受験予定者数及び受験者数には、令和4年7月4日（月）に実施した、追試験受験者2人を含む。

今後、各専門委員会・部会における修得単位の審査及び学修成果・試験の審査を経て、令和4年8月22日（月）開催の学位審査会で最終審査が行われ、合格者には学士の学位を授与する予定です。

○ 令和4年度10月期申請について

学位授与申請は、毎年度2回（4月期と10月期）受け付けており、次回の申請は、令和4年度10月期申請となります。

- ・ 申請に関する詳細については、当機構ウェブサイトの下記ページに掲載している『新しい学士への途』（令和4年度版）をご覧ください。

https://www.niad.ac.jp/n_gakui/application/shinseishiryoku.html

（トップページ > 学位の授与 > 申請案内書『新しい学士への途』、『学位授与申請書類』等）

- ・ なお、申請には『学位授与申請書類』（令和4年度版）の冊子が必要となりますので、上記ページよりご請求ください。

※ 申請書類等は日数に余裕を持ってご請求ください。

機構の窓

○ 新型コロナウイルス感染症対策について

当機構では新型コロナウイルス感染症対策として、令和4年6月の機構主催の各行事について、以下のとおり対応を行い開催しました。

令和4年6月

開催予定日	行事名	対応	担当課
8日、16日	令和4年度高等専門学校機関別認証評価における評価担当者に対する研修	ウェブ開催	評価支援課
13日	法科大学院認証評価に関する説明会及び令和5年度に実施する法科大学院認証評価に関する自己評価担当者等に対する研修会	ウェブ開催	評価支援課
18日	大学改革支援・学位授与機構で学士の学位取得をめざす方へのオンライン説明会	ウェブ開催 (YouTube 生配信)	学位審査課
20日、21日、22日	令和4年度法科大学院認証評価に係る評価担当者に対する研修	ウェブ開催	評価支援課
6月中旬～下旬	令和4年度大学機関別認証評価における評価担当者に対する研修会	音声解説付資料の配付、オンライン質問会等の開催	評価支援課
6月下旬～7月中旬	大学機関別認証評価等に関する説明会及び令和5年度に実施する大学機関別認証評価等に関する自己評価担当者等に対する研修会	ウェブサイトへの資料掲載、音声解説付資料の配付	評価支援課

主要行事日程

○ Schedule

7月

日	行事名	担当課
11 日	NIC-Japan セミナーシリーズ「台湾の教育制度・高等教育資格」	国際課
22 日	高等専門学校機関別認証評価検討ワーキンググループ（第2回）	評価支援課

8月

日	行事名	担当課
19 日	高等専門学校機関別認証評価委員会（第2回）	評価支援課
22 日	学位審査会（令和4年度第2回）	学位審査課
29 日	大学ポートレート運営会議（第17回）	評価企画課

9月

日	行事名	担当課
10 日～ 10 月 4 日	令和4年度 10 月期学位授与申請（データ入力）受付期間	学位審査課
22 日～ 10 月 4 日	令和4年度 10 月期学位授与申請（書類送付）受付期間	学位審査課
28 日	令和4年度大学質保証フォーラム	国際課



独立行政法人

大学改革支援・学位授与機構

National Institution for Academic Degrees and Quality Enhancement of Higher Education

